

富山県へのうつりかわり

天平18年(746年)



大伴家持が越中守になる。

寿永2年(1183年)



源義仲が倶利伽羅峠合戦で平家を破る。

文明3年～天正8年(1471～1580年)



一向一揆が盛んになる。

寛永16年(1639年)



富山藩成立。前田利次に富山10万石が与えられる。

明治16年5月9日(1883年)



富山県が石川県から分県、富山県の誕生

【古代】

いまから 1300 年以上前の昔、北陸地方一帯は「越(高志・古志)の国」(こしのくに)とよばれていました。それが 7 世紀末、越前、越中、越後の 3 つに分かれ、越中の国府は、いまの高岡市伏木におかれました。

越中守として文献に初めて登場するのは天平 4 年に任ぜられた田口年足(たぐちとしたり)で、次に登場するのが天平 18 年(746)に任ぜられた、万葉の歌人としても知られる大伴家持(おおともものやかもち)です。家持は、28 歳で国守となり、5 年間に越中でくらししました。

そして、家持が任期をおえて越中を去ったのち、天平宝字元年(757)に越中国から能登地方が分かれ、越中はいまの富山県の県域と同じになりました。

【中世】

武士による争いがくりかえされた時代、越中でも、源平による「倶利伽羅峠の戦い」にはじまり、戦国時代の一向一揆、上杉・織田の両勢力の侵入など、はげしい争いがつづきました。

【近世】

天正 11 年(1583)、越中は織田氏の武将、佐々成政によりほぼ統一されました。その後、越中 4 郡(砺波・射水・婦負・新川)は加賀藩前田氏の領国となりましたが、寛永 16 年(1639)に婦負郡と新川郡の一部が『富山藩』として分けられ、前田利次(まえだとしつぐ)が初代富山藩主となりました。

江戸時代、富山藩は洪水などの水害に苦しみながらも、用水を引き、新田開発をし、農業、売薬業をはじめとした産業をおこしました。また、伏木港や岩瀬港では、このころ日本海を行き来した北前船の中継地として、コンブ、ニシン、酒、米などの交換や売買が盛んに行われました。

【近世・現代】

明治 4 年(1871)、「廃藩置県」により、越中のうち旧・富山藩領は富山県に、旧・加賀藩領は金沢県の一部となりました。一時、越中の全部が石川県に入れられたこともありましたが、分県運動が起こり、明治 16 年 5 月、現在の『富山県』が生まれました。

昭和 20 年 8 月、富山市は、空襲によって家も工場もなにもかもが焼け野原となってしまう大きな被害を受けました。しかし、戦後はいち早く復興にとりくみ、都市計画をすすめました。

「昭和の大合併」により、市町村の合併が進み、昭和 44 年には「9 市 18 町 8 村(35 市町村)」となりました。

そして「平成の大合併」により、平成 18 年 4 月、富山県は「10 市 4 町 1 村(15 市町村)」になりました。